

平成 30 年度 第 1 回 仙台市社会福祉審議会 地域福祉専門分科会 議事録

1 日 時 平成 30 年 10 月 24 日（水）午後 1 時 30 分～午後 3 時 40 分

2 場 所 仙台市役所本庁舎 2 階 第二委員会室

3 出席者

[地域福祉専門分科会委員] 12 名（委員定数 14 名）

阿部重樹委員・庄司健治委員・大瀧正子委員・折腹実己子委員・小岩孝子委員・小菅玲委員・中田年哉委員・中村祥子委員・根本勁委員・村山くみ委員・渡邊純一委員・渡邊礼子委員

※欠席委員：島田福男委員・諸橋悟委員（五十音順）

[事務局]

○健康福祉局

熊谷地域福祉部長・大槻社会課長・宮野参事(兼)総務課長・須藤保護自立支援課長・加藤障害企画課サービス管理係長・伊藤障害者支援課長・伊勢高齢企画課長・松本地域包括ケア推進課長・木村地域包括ケア推進課認知症対策担当課長・佐野健康政策課主幹(兼)健康増進係長

○子供未来局

佐藤子供家庭支援課長・山田子供保健福祉課長

○市民局

上田市民協働推進課長・櫻井消費生活センター所長

○教育局

春日学びの連携推進室長

○区役所・総合支所

大石青葉区保健福祉センター管理課長・梅原宮城総合支所管理課長・大久宮城野区ふるさと支援担当課長・佐竹宮城野区保健福祉センター管理課長・斎藤若林区ふるさと支援担当課長・遊佐太白区ふるさと支援担当課長・菊池泉区保健福祉センター管理課長

※担当課：健康福祉局社会課

[オブザーバー]

○社会福祉協議会 岩渕地域福祉課長 宍戸地域福祉課地域福祉係長

4 内 容

(1)開 会

(2)委員紹介及び職員紹介

平成 28 年度末退任の鈴木孝男委員の後任として、今年度より就任した村山くみ委員を紹介。

(3)議 事（阿部会長による進行）

議事録署名人について、中村祥子委員を指名

①第3期仙台市地域保健福祉計画の評価について

社会課長から説明（資料1）

<質疑応答>

【折腹委員】

「施策の方向 2-1 地域団体による福祉活動の充実・強化」と「施策の方向 4-2 地域を構成するさまざまな主体間の重層的ネットワークの構築」の評価に対しての話である。

まず5ページ（施策の方向 2-1）の課題・今後の方向性の2つ目の■について。地域団体による福祉活動は、とても取り組みが進んでいると感じているし、実際に少し関わらせてもいただいている。様々な活動に関わらせていただく中で、区、地域、圏域ごと等の取り組みの差やバランスが全市的にどうなのかがよく見えない。例えば被災地域とそうでない地域、また私が勤務する地域と住んでいる地域でも活動が全然違うため、よく取り組んでいるところとそうでないところのアンバランスが広がっているような感覚を持っている。各地区の活動について、2つ目の■に「好事例やノウハウの共有に向けた支援を行っていく」と記載があるが、各地区の活動の情報を発信することにもっと力を入れていただいたり、宮城県でも進めている「活動の見える化・見せる化」をしながら、関係団体相互の交流を図ったり、活動の発表をしたりできると、課題を抱えている地域にとって大きな参考になるのではと感じた。

もう1点、8ページ（施策の方向 4-2）の取り組みの成果の4つ目の□について。機能強化専任職員が全地域包括支援センターに配置されて3年度目になるが、だいぶ深く地域に入って活動している状況だと受け止めている。今後に向けて、市には第2層の生活支援コーディネーターだけではなく、課題である第1層の生活支援コーディネーターの配置の検討をしていただきながら、機能強化専任職員には、さらに地域包括ケアを推進していく全体的なけん引役になってもらえたらいいのではと感じている。

また、今後の方向性の2つ目の■で、関係機関の中で、特に「企業や学校、医療機関等を含んだネットワークの拡充に取り組む」と記載しているが、企業や医療機関との連携は、やはり現場でも課題と感じている。そのような機関との関係性をしっかり構築することは大変重要だと思うため、企業に実施したというアンケート結果を公表し、取り組みの意欲を示しているところの地域バランスはどうか等教えていただき、しっかり現場で連携がとれるような体制づくりをしていただきたい。私が所属している社会福祉法人も地域にとっては大切な企業の一つであり、地域貢献を念頭に置いて組織されているところである。ぜひ企業にも地域活動を進めていただきたいと思っている。

【阿部会長】

いくつかの質問と意向が示された。1点目は、例えば区、あるいは地域間での取り組みと成果に少し温度差があるのではないかと。その温度差に対し、全市的な調和が求められているのではないかと現状認識を感じられているが、そのあたりが評価になかなか出てきていないのではないかと。2点目は、第1層の生活支援コーディネーターの充実について。3点目は、多様な団体・組織との連携が大事だが、特に企業との連携についての調査結果をもう少し公表・公開して提供してほしいというご意向である。事務局いかがか。

【社会課長】

1 点目と 3 点目について社会課より回答する。例えば市民局では、町内会での取り組み事例を紹介した冊子やリーフレットを発行したり、また、委員もご存知と思うが、市社会福祉協議会で定期的に各地区社協の取り組みを冊子にまとめ、社協区事務所等で配架したりといった取り組みはしているが、情報発信という面でまだ不十分な点があると思うので、なお工夫してまいりたい。さまざまな地域活動がある中、似たような地域でこんな取り組みが行われているという情報はかなりのヒントとなり、そこに視察へ行くという動きにつながる事例もあるため、もう少し我々も情報発信という面で努力していきたい。

3 点目、社会福祉協議会で企業に行ったアンケート結果については、まだ公表できる状況にないが、何らかの形で見える化ができるかどうか、地域によってどれくらい社会貢献意欲のある企業があるのか等について、どんな公表の仕方ができるのか、社会福祉協議会において検討させていただきたい。2 点目については高齢企画課より回答する。

【高齢企画課】

折腹委員から、地域包括支援センターの機能強化専任職員（第 2 層生活支援コーディネーター）の活動に関してご意見をいただいたところであるが、現在、地域包括支援センターに第 2 層生活支援コーディネーターが 1 名ずつ配置されており、地域の生活支援体制の整備、つまり支え合いの促進といった地域資源の創出などに向けて、活動いただいている。そのような取り組みは今後一層重要となってくるが、第 2 層の生活支援コーディネーターの方々が活動するにあたり、なかなか単独では難しい課題があるため、それを支援する全市、あるいは区レベルの第 1 層生活支援コーディネーターの配置をして、より第 2 層の活動が進むように支援をしてほしいというお声をいただいているところである。現在、第 2 層の生活支援コーディネーターの皆様への支援の方策について、内部で具体化に向けた検討を進めているところである。まだ具体的にお示しできる段階ではないが、鋭意検討を進めてまいりたいので、引き続きよろしくお願いしたい。

【阿部会長】

私より、今の折腹委員からのご意見を踏まえ、例えばだが 10 ページの評価案について、2 つ目の「・助成金の交付に加え～」の 3 行目「さらなる活性化のため～」の文で、「好事例や活動ノウハウの一層の見える化等を通じて共有を進める～」や、文字数が合わないようであれば、「～一層の見える化と共有を進める～」と入れるなど、そのような配慮をするということで受け止めさせていただいてよろしいか。

【折腹委員】

了解した。

【阿部会長】

あまり文字数を増やすわけにもいかないかと思うので、事務局でも今のことも参考に、取り組めるかどうか検討いただければと思う。

【渡邊委員】

折腹委員からの質問の関連だが、私も地域包括支援センターと関わりが多く、一緒に活動している。機能強化専任職員には本当に一生懸命やっけていただいているが、この業務をやるがゆえに、ケアマネの仕事まで手が回らない状況がある。地域包括支援センターで要支援 1、2 の方たちのケアも必要となると人手が足りないため、要支援 1、2 の「介護難民」が非常に増えているのが現状である。24 時間連絡が取れる地域包括支援センターもあるが、決まった時間で終わってしまい、その後は相談できない場所もかなりある。6 つくらいの地域包括支援センターからアンケートを取ったところ、職員が足りず 24 時間対応したくてもなかなかできないと皆さんおっしゃっている。ケアマネ業務に加え権利擁護の業務など、いろいろな業務がありすぎる。高齢化とともにそういう相談も増え、現在の職員体制で対応できないと多くの苦情がでているのを把握していただきたい。

それからもう一つ、社協の中に CSW が配置されたことで、私たちとしても相談機能として非常に助かっている。せっかく大学で CSW 養成講座をしており、社協職員以外でも CSW として養成した方たちがいるのであれば、そういう人たちがもっと地域の中で活躍できるような場があってもいいのではないと思う。CSW と地域包括支援センターがもう少し連携していかないと難しい。地域包括支援センターの職員は他から来るため、地域の内情を理解するのはなかなか難しい。その際に、先ほど折腹委員がおっしゃった第 1 層の生活支援コーディネーターがあってもいいのではと思う。私も機能強化専任職員と一緒に動くことも多いが、地域のコーディネートをしあげないと当該職員は動けない。例えば学校とつなぐ、学校のことを知っている人とつなぐ、また市民センターの職員とつなぐ、このつなぎの役割のコーディネーターが地域の中にいることによって機能が強くなっていくため、第 1 層の生活支援コーディネーターは必要だと思う。

【阿部会長】

地域包括支援センターの人員が足りずに、機能不全に陥っているのではないかというご質問、現状評価だと思うが、事務局いかがか。

【地域包括ケア推進課長】

今年度、地域包括支援センターと意見交換させていただく場面を設け、年度前半では、今お話しいただいた第 1 層の生活支援コーディネーターについて、どういったところに配置するのがいいのか、どのような人材が好ましいのかということについて意見交換させていただいた。その意見を基に、現在庁内で検討しているところである。また、業務負担の大きさについては、日頃から我々のところにもご意見をいただいているところであるが、今現在、地域包括支援センターに依頼して、どういった業務が一番負担になっているかのアンケートを実施している。そのアンケート結果や今回設けさせていただいた意見交換の場などを通じて、どういった支援があれば、少し負担が軽くなるのか、どういったものがあれば、より仕事がしやすくなるのかなどご意見をいただきながら、よりよくなるように、今後検討して対処していきたいと考えている。

【渡邊委員】

ぜひ検討をお願いしたい。

【阿部会長】

もう一点、CSW は社協職員以外でもないのか、大学で養成した人の活躍の場を、ということについては、十分認識しているつもりである。ただ「CSW」という呼称は、改めて委員の皆さんに問いかけてみたいと思うが、誰のことを言っているのかよくわかっていない、わかっているようでわかっていない。CSW と名乗って、既存の地域社会の相談業務などを担当されている方と対等に会話をするということが、なかなか認められていないという現状があるらしいということが私もわかってきた。その辺をもう少し、圏域全体で整理していく必要があるのではないかと考えている。これはおそらく宮城県や仙台市から協力いただかないと難しいことだろうと思う。さらに生活支援コーディネーターと CSW を担当する行政の部局が違う中で、共通の土俵をどう作っていくか、なかなか大変な問題だと思うが、その辺をうまく整理していかないと、地域福祉あるいは地域の協働ということとは進まないのではないかと考えている。私が答えてしまって申し訳ないが、CSW スキルアッププログラムに関わっている関係でお許し願いたい。

【庄司副会長】

CSW について、10 ページに今後住民にも CSW の役割について理解の浸透をしていきたいと記載してあるが、現在市社協の区支部事務所に 2 名ずつ配置されている職員は、専門職であって専門職でないとは認識している。本人は CSW に指名をされるが、業務は専任ではなく兼任である。現実には CSW の仕事もしながら社協の他の仕事もしている。しかしそれでは活動する範囲や能力などに限界があり、十分に力を発揮できないとは私は思っている。ノウハウが蓄積されたというのは非常に評価しており、それを活かしていくのであれば、社協の専任職員としてきちんと配置をして、専門職としての教育や研修を受けて、地域の中に溶け込んでいくことが必要である。地域住民の中には福祉課題なり、悩み事を抱えている方が顕在化している。この方たちが孤立することないように、地域で支え、あるいは助け合っていくために地域でどうしたらいいのか、100 有余ある地区社協の活動にも温度差が現にあるため、この底上げをしていくのも CSW の役割かなと考えている。当然その中には包括職員との連携、学校や町内会との連携も必要であり、これも CSW の役割だと思っている。これを市でも、もう少し力を入れていただいて、専門職として活動しやすい環境を提供していただきたいという要望である。

【社会課長】

社協に今、5 区 1 支部に 2 名ずつ、統括 CSW と呼ばれる係長相当の方と、ほぼ専任で担当する CSW を計 12 名配置している。なかなか CSW の業務のみに専従できる状態ではないかもしれないが、CSW を社協に配置させていただく際に、今やっている仕事に単純に CSW 業務を上乗せしている訳ではなく、社協と協議し、臨時職員を 1 人ずつ新たに配置することにより、今まで職員が担っていた業務の一部を臨時職員に割り振るような形で業務軽減を図っている。それでもまだというお話かもしれないが、そこは必要に応じて社協とも情報交換しながら、社協での CSW の配置のあり方を考えていきたいと思っている。

それから 2 点目の地区社協によって活動の温度差があるというのは、ご指摘のとおりである。先ほど、市内 11 地区で重点支援地区に CSW が入って支援している旨を「成果」の所で述べたが、その趣旨も、やはり小ネット活動の温度差があり、地区によっては生活支援活動をやっていないとこ

ろもあるなど、その活動の差をできるだけなくするような形で CSW に地域に入ってもらい、まず何かから手をつければいいのか、というところから伴走型の支援をしていただきたいと思っている。そこは市としても認識を共有している。

【阿部会長】

今の庄司委員の発言でもバラつきがあるという点がご指摘されたので、先ほどの折腹委員のご発言と同様に、10 ページの本分科会としての全体評価のどこかに、「全市的な調和を図りつつ」、あるいは「底上げに留意しつつ」等の言葉を入れてはどうか。CSW の件については、本日の報告の 2 つ目でも話があるため、またそこで意見をいただきたい。

このあとも報告が 2 件あるため、本分科会による 29 年度の全体評価について取りまとめをしたい。すぐには改善、解決するのは難しい課題を多くご指摘いただいたが、本日いただいたご意見のほか、言葉使い等でももう少し工夫が必要などあるかと思うため、その点についてご意見をいただきたい。ご意見等いただいたものを踏まえ、私と事務局で最終的に本分科会としての評価結果として HP に公表したいと考えているので、ご了解をいただきたい。

【中村委員】

CSW の評価についてだが、社会資源があってそれを CSW がコーディネートする機能を果たせるためには、地域でそれぞれの地域性を踏まえて動く社会資源がないと、CSW だけが躍起になってもなかなかうまく機能しないと思う。先ほど渡邊委員が要支援 1、2 の介護難民とおっしゃったが、地域ではそれを大変危惧している。この場合は制度のことを言うところではないと思うが、仙台市では地域の受け皿づくりというところで、委託の形態にしないでボランティア団体等による要支援 1、2 の生活支援を推進する方向性に決められたと思うが、それによって賄えるのかどうかを危惧している。賄えないのであれば、CSW がいくらコーディネート機能を発揮しようと思っても、推進する組織づくりがうまくいかないとなかなかできないのではないかと考えている。基本的な制度設計とそれをコーディネートする CSW との連携でようやく生活支援が機能すると思うため、ここで言うことではないと思うが、その辺との兼ね合いも考慮し、CSW の仕事や役割分担、評価をしないといけないのではないか。成果が出た、出ないというのは、CSW の責任だけではないと思うので、その辺が心配である。

【阿部会長】

CSW を表現するのによく使われる言い回しで「制度の狭間の問題をすくい上げる」という言い方がある。制度の狭間の問題ということでは、今中村委員が言われた部分もあるが、制度が不十分な部分だからこそなかなか成果が出てこない、上がりづらいというのはおっしゃるとおりである。その点をよく踏まえて、CSW のパフォーマンスを評価すべきだと大変貴重な意見だと思う。それから制度の狭間の問題というのは、さまざまな理由で制度の狭間になっているため、ある意味で制度化していくことも必要だろうと思っている。そういう意味では、CSW と行政との関係、パイプやステージをどう作っていくかもこれからの課題だろう。

【中村委員】

CSW との関係性だけでなく、それをコーディネートするそもそもの住民参加型の活動の保障や発生、維持というところをしていかないと本来の活動の使命が果たせないのではと感じている。

【阿部会長】

では公表予定の評価案については、今のような条件付きでご了解いただいたということにさせていただきます。

【大瀧委員】

10 ページの一番最後の段落に「ひきこもり支援」について記載しているが、文字数の関係で可能であれば、そこに「妊産婦支援」というのも入れていただくといいのかもしれない。産後の虐待事例の増加が問題になっているため、「ひきこもり支援、妊産婦支援に係る～」などと入れていただくといいのではと思った。よろしく願いたい。

【社会課長】

入れさせていただきます。

【阿部会長】

では、今日の中ではそれは書き込むということで、まずご理解いただきたいと思う。

(4) 報告（阿部会長による進行）

①改正社会福祉法の概要について

社会課長から説明（資料 2）

<質疑応答>

【渡邊委員】

ボランティア連絡協議会の立場から、今回の改正ではボランティアに非常に期待をかけられていると感じた。

【阿部会長】

ボランティアにも非常に大きく期待をされているとって間違いないと思う。ただその前に「地域住民に」という表現がたくさん出てきたように、地域住民によくわかってほしいという内容であった。非常に理想が高く掲げられた法改正であるため、現実とのギャップもあるだろう。今回は法律の改正についての説明のため、本分科会としてはこれで終わりとさせていただいてよろしいか。

【各委員】

—了承—

②コミュニティソーシャルワーカー（CSW）の取り組みについて

市社会福祉協議会から説明（資料 3）

<質疑応答>

【中田委員】

資料 3 について、細かいことだが、最後のページの福祉プラザにある社協の連絡先に色があるのはいいが、宮城野と若林にも色がついているのは何か意図があるのか。おそらく見やすくするために色を交互にしているだけかと思うが。

【市社会福祉協議会】

色をつけているのは、この方が見やすいのではないかとということだけで、特にそれ以上の意図はないため、変えても構わない。

【阿部会長】

おそらく中田委員は、意図を感じられてしまう恐れがあるのではということでの質問だと思う。

【中村委員】

CSW という概念が、地域包括支援センターの生活支援コーディネーターと近いと感じた。先ほどの意見は地域包括支援センターの生活支援コーディネーターのことをイメージしていたので、ちょっと間違っていたかもしれない。そういうことであれば、この CSW のリーフレット自体はとても見やすくて良いと思うが、地域包括支援センターの役割との違いが分かりづらいのではないかと。所々に地域包括支援センターとの連携が書いてあるが、市の中では財源や所管課が異なると思うが、住民にしてみればとても分けにくいものだと思う。もし地域住民を対象にこのリーフレットを配布するのであれば、両方の機能をもう少し分かりやすく書いていただけるととてもいいのではないかと。住民にとって一番分かりやすいのが地域包括支援センターである。CSW はそことの連携ということで動いていると思うが、CSW と包括の両方が機能するように書いていただけると資料として有効なのではないかと。

【阿部会長】

大変難しい課題だと思う。実は先ほど申し上げたように、「誰が CSW か」といった時に、実はわかっているようでわかっていない。例えば今の話に出た地域包括支援センターの方々が一番分かりやすいが、市の保健師で地域保健活動に熱心な方も CSW 的であり、また児童相談所の相談員の方も最近はその傾向があるし、もちろん民生委員もそうである。いろいろな方が同じようなことをやっている中で「これをやっているのが CSW だ」と言い切るのは、同じようなことを他の専門職がやっていることもあり大変難しい。切り分けが大変難しいということが現状にあるということが、私も社協と一緒に勉強させていただいて初めて気づかされた。

【市社会福祉協議会】

CSW の役割がわかりづらいということはよく言われている。市社会福祉協議会では職務名として

この名称を使っている。また今会長がおっしゃったとおり、さまざまな分野でコミュニティソーシャルワークを駆使しながら活動している方々いるという実態がある。その中の一つとして、第 2 層の生活支援コーディネーターがいらっしゃるという認識であり、このリーフレットの中でそこだけ比べると、少々誤解を生んでしまう可能性もあるため、まず私どもとしては、コミュニティソーシャルワーカーが社協におり、いろいろな相談に対応しますというところで、今回はいいのではと思っている。

【折腹委員】

現場では地域包括支援センターと CSW がいろんなところで連携している。町内会のいろんな活動でも一緒になるし、さまざま情報共有をしながら取り組んでいるのが現実である。地域包括支援センターが開く担当圏域ケア会議など、地域のいろんな課題を話し合うところにも CSW が来て、地域を広くとらえて課題整理をしていただいたこともある。そういう意味では現場でよく連携しているため、役割を切り分けることはなかなか難しいのではないかなと思う。先ほど私が言った第 1 層の生活支援コーディネーターのような役割も、CSW がある意味で果たしているところもある。ただそれが高齢者の分野だけではない役割もあるので、そこを明示することは非常に難しいのではないかな。

【阿部会長】

折腹委員に応援いただき、わかりやすくしていただいた。私も村山委員と一緒に、宮城県における CSW についての勉強会や研究会を開催する中で、CSW は誰のことか、何をしている人のことか、わかっているようでわかっていない、定義が難しいということに初めて気づいた。中村委員もご理解難しいかもしれないが、そういう現状の中で「CSW とは」というところをわかりやすくリーフレットにしてみたと、とりあえずのこととしてお納めいただければと思う。

この頃私は「+CSW」という言い方を考え、民生委員や地域包括支援センターの職員の方も、コミュニティソーシャルワーク的なことをするので「+CSW」、社会福祉協議会の名刺でも「+CSW」など、「+CSW」というような称号あるいは呼称を本県の関係者が共有できれば、圏域版の事実上の認証資格的なものになる。その肩書を持っている人は、地域住民に寄り添いながら、地域住民と共に、地域の問題を解決していく人だという安心感を与えるような効果もあり、また CSW を名乗っている方も、もっとモチベーションが上がるのではないかなということは今考えている。ただしそれは宮城県や仙台市、あるいは県内の市町村のご理解をいただかないとできないことであるため、周りからは実現は難しいのではとされているが。そこまでいけば何とかなのではないかなと思うが、中村委員も少々納得いかないと思うところがあるかもしれないが、今日のところは仙台市社協に代わって弁解させていただきたい。

【中村委員】

社協どうこうといった区別がない住民の一人として言うと、やはり国の予算の中できちんと位置付けられている人の仕事だということを住民に分かりやすく伝えることが必要だと思う。そのため、社協の CSW のリーフレットのように、地域包括支援センターがどんな仕事をしているか等もっとアピールしてほしい。

【小岩委員】

今、私の法人でモデル事業をやっているが、その関わりからも CSW は特に活動していると感じている。アドバイスしたり、一緒に考えたりするのが CSW だと思っているが、それを受ける地域住民の側にも問題があるのではないかと考えている。リーフレットの最後のページにも「地区社協活動の支援」と書いてあるが、地区社協の会長でさえ、どういうふうに自分の仕事をしたらいいのか、福祉委員がどんなことをしたらいいのか、地域福祉推進員が何をしたらいいのか、町内会長がどんなことをするのか、民生委員さんが実はどういうことなのかというのがわからない、失礼ながら、把握してないで引き受けている方たちが多々いるため、CSW にしても地域包括支援センターにしても、なかなか大変なのではないかと反対に思う。そのためその辺について、社会福祉協議会でもう少し、どういうことをするのがこの役割の人だということを新たに言っていただくと連携しやすいだろう。CSW は社会福祉協議会の人で、地域に来て、地域のことを元気にしていくために一緒に考えてくれる人だと、そういう風に思っている。地域の人間としては地域包括支援センターも同じである。だから受け取る側の姿勢というところにも問題があるのではと思う。みんなが一生懸命やっているが、何を本当はどうしたらいいのかわからないでやっているところが多いのではないかと。今はサロンの流れなので、地区社協も民生委員さんもみんなサロンをやっているが、お金が無くなっても本当に続けるのか、どうやっていくのかということの方が課題だと思っている。その流れだけではなく、本当の役割は何かということをもう少し私たちも学ぶこと、もう一回振り返ることによって、この CSW もうまくいくのではないかと考える。CSW は今後必要な存在だと思っている。

【阿部会長】

今の小岩委員のご発言のように、このリーフレットは、地域住民の方に仙台市社協の CSW の役割をお分かりいただくためのもの、そういうふうに活用させていただきたいということでご理解いただきたい。

(5) その他（阿部会長による進行）

特になし

(6) 閉会